

今日のシライ中

白井の愉快的仲間たち

Vol.21

ナナフシ

校舎2階の窓の戸締りをしようとしたときのこと。何やら細い枝がレールの辺りに……。どけようと手を伸ばすと、あわててその手を離れ、すりと落ちたあの姿！惜しかった！！

そうです、「ナナフシ」です。皆さんは「ナナフシ」を見たことがありますか？本当に見事な擬態で、まさに木の枝そのもの。白井中では、気にしてみれば、結構見られるそうです。（職員玄関の前でも、ひょろひょろしている姿を目撃しました。ただ、このときの「ナナフシ」は、どういう理由か、あの華奢な脚を結構失っていました。「ザトウムシ」のところでも紹介した「自切」でしょうか。）さて、この「ナナフシ」は、擬態の見事さもさることながら、（どんな意味だろう？ Aそれは当然として、さらに、 B忘れ去られたことではあるが Cさる山のお猿さんのように 答えはA。）



その生態もなかなかユニークです。まず、目を引くのは、その生殖方法です。「ナナフシ」は、基本、「単為生殖」（「たにいせいしょく」って何だろう？他にも結構いますよ！調べてみてね。）をする生物です。「オス」がいなくても「メス」だけで繁殖できる昆虫です。あんなにゆっくり動かし、そもそも（お互い）見つけにくいので、こんな生殖方法をとったのでしょうか？また、その卵の殻は結構硬く、形も変わっています。（気になる方は、調べてみましょう！）なんで、こんなに硬いのか、研究した先生方の結論としては、「鳥に食べられても消化されることなく、生育域を広げるため」だそうです。生き残りをかけた生物の戦略はしたたかで、合理的です。もちろん、「オス」は、あまり必要ないので、ほとんど生まれません。見つけるのは至難の業だそうです。それでも、「0」でなく、「オス」が生まれるのは、それなりに、種の多様性の維持に必要なからでしょうか。白井中や、日本でみられる「ナナフシ」は、そう大きくありませんが、世界最大級のものでは、全長約63cmにもなります。最後におまけです。先ほど「単為生殖」する生物は結構います、と書きましたが、私たちの身近にもいる「アブラムシ」もその一つです。「アブラムシ」は、「単為生殖」でどんどん繁殖し、そのコロニーを爆発的に広げていきます。さらに驚くことに、「卵」ではなく、「アブラムシ」の形で産み、しかも、その胎内にすでに子を宿している「卵胎生単為生殖」という繁殖方法なので、勝ち目はありません。また、「甘露」という排泄物を出し、蟻を上手に手なずけ、守ってもらいます。（「アブラムシ」の天敵として有名な虫は？ 「テントウムシ」です。「生物農薬」とも呼ばれ、近年大手企業も参画し、注目されています。そのきっかけになった研究は、「千葉県立成田西陵高等学校」のもので、コンテストで優勝した発表です！）

そして、さらにすごいのは、餌がなくなってくると、羽の生えた個体が出現し、移動することです。また、秋口には、「オス」が生まれ、「有性生殖」し「卵」で越冬、暖かくなってから孵化しますが、そこから生まれる個体は全て「メス」です。徹底していますね。あの小さな弱々しい生物にもこんなに不思議でしたたかな戦略があるとは！驚きの一語です！

